

小学校

平成 15 年 度

教育研究員研究報告書

社 会

東京都教職員研修センター

平成15年度 小学校社会科教育研究員名簿

分科会名	地区	学校名	氏名
中学年	新宿	東戸山小学校	佐々木 琢
	江東	浅間豎川小学校	山崎 利香
	目黒	宮前小学校	平間 学
	渋谷	笹塚小学校	増井 正則
	中野	桃丘小学校	松岡 葉月
	北	王子小学校	桂 大輔
	足立	梅島第一小学校	中川 絵美子
	葛飾	小松南小学校	向山 聡子
	江戸川	小岩小学校	江澤 曜子
	国分寺	第三小学校	米澤 知子
	武蔵村山	第七小学校	桑山 明子
高学年	品川	平塚小学校	井口 明
	杉並	杉並第三小学校	生井 信太郎
	板橋	高島第一小学校	酒川 敬史
	練馬	豊玉第二小学校	増田 隆一
	江戸川	第二葛西小学校	芹沢 勲
	八王子	みなみ野小学校	三島 誠
	八王子	川口小学校	竹越 康晴
	調布	深大寺小学校	山本 康人
	羽村	栄小学校	濱辺 理佐子

全体世話人

分科会世話人

<担当> 東京都教職員研修センター統括指導主事 鈴木 義昭
 指導主事 新貝 朗
 指導主事 佐藤 之保
 指導主事 森 清隆

目 次

主題設定の理由	2
中学年分科会	3
1 中学年分科会主題設定の理由	
2 研究の仮説	
3 研究構想図	4
4 研究の内容	5
(1) 教材の分析・考える場の明確化	
(2) 指導と評価の工夫	
5 実践事例	7
(1) 単元名	
(2) 教材構造図	
(3) 比較・関連表	
(4) 指導計画及び具体的評価規準	
(5) 研究の成果と課題	
6 研究のまとめ	1 3
高学年分科会	1 4
1 高学年分科会主題設定の理由	
2 研究の仮説	
3 研究構想図	1 5
4 研究の内容	1 6
(1) 自己評価育成計画を基にした指導	
(2) 自己評価力を高めるための工夫	
5 実践事例	1 9
(1) 単元名	
(2) 基礎・基本について	
(3) 単元の目標	
(4) 評価計画	
(5) 考察	
6 研究のまとめ	2 4

主題設定の理由

全体研究主題

基礎・基本の確実な定着を図る指導と評価の工夫 ～社会的事象の意味について考える力の育成に重点をおいて～

新教育課程が目指す「生きる力」を知的側面からとらえた「確かな学力」とは、「知識や技能に加え、自ら学び主体的に判断、行動し、よりよく問題解決する資質や能力」であるとされている。その「確かな学力」の根底をなすものが学習指導要領の示す基礎的・基本的内容である。

基礎・基本の確実な定着を目指すにあたり、平成12年12月に教育課程審議会から「児童・生徒の学習と教育課程の実施状況の評価の在り方について（答申）」が出された。その第1章第2節「これからの評価の基本的な考え方」に次のような指摘がある。「指導と評価は別物ではなく、評価の結果によって後の指導を改善し、さらに新しい指導の成果を再度評価するという、指導に生かす評価を充実させることが重要である。評価は、学習の結果に対して行うだけでなく、学習指導の過程における評価の工夫を一層進めることが大切である。」このことは、評価を指導に生かす工夫の大切さを示している。つまり、評価に基づいて指導を行い、また、その結果を評価するという指導と評価のサイクルを繰り返すことによって、基礎・基本の定着が図られるのである。

以上のことを踏まえて昨年度の研究では「指導と評価の一体化」の工夫がテーマに取り上げられた。今年度はこれまでの研究員の成果を受けながら、学習過程や一時間の学習の中での指導と評価をいかにしてより一層効果的に行うかという問題意識をもって研究主題を設定した。

今、社会科においては、「網羅的で知識偏重の学習」から、「児童一人一人が観察・調査、体験、表現など具体的な活動を通して、社会的事象の意味や働きなどを考えたり自分の意見を述べたりする学習」への改善が求められている。このほか、社会的事象への関心や社会的事象を公正に判断することが重視されている。

しかし、実際の社会科学習においては、社会的事象の意味を考えるまでに至らず、調べた事実を発表して収束する状況が多く見られる。その理由として、教師が児童に何をどのように考えさせるのかを十分に把握しないまま指導を行うということが考えられる。このような指導では児童に考える力が身に付かない。そこで本研究では、「調べて考える」社会科における基礎・基本の中で、特に考える力を重視し、考える力の育成のための指導と評価を工夫する必要があるとらえ、サブテーマを上記のように設定した。

本研究では、社会科学習において児童が調べた事実を基にして、じっくりと考えることのできる授業、児童が主体的に学習に取り組み、確かな事実と事実を関連付けて社会的事象の意味を自分なりに問い直し、社会的な見方や考え方を身に付けられる授業を目指し、そのための指導と評価の工夫を行う。また、評価については、意欲や思考・判断などを見取り、その場で一人一人の児童に合わせた効果的な指導・支援を行う。

中学年分科会

中学年分科会研究主題

地域の社会的事象の特色や相互の関連について 考える力を育てるための指導と評価の工夫

1 中学年分科会主題設定の理由

平成14年度から全面実施された学習指導要領は、「自ら学び、自ら考える力」などの「生きる力」の育成を目指している。その趣旨から社会科改訂の要点として、社会的事象を公正に判断するための能力や、社会的事象の意味や働きを考える力が重視されている。

学習指導要領によれば、中学年社会科における「考える力」とは、「地域の社会的事象の特色や相互の関連について考える力」を指している。児童が考えるためには、まず身近な地域の人物や事象について、具体的な活動や体験を通して調べ、実感的に事実をとらえることが必要である。さらに、調べた事実を比較したり関連させたりする“考え方”を知ることが必要である。そして、事実を比較したり関連させたりして考える活動を積み重ねることで、高学年の社会科学習における社会的事象の意味を考えることにつながっていく。その意味で「特色や相互の関連を考える力」を身に付けることは、中学年社会科における基礎・基本となる。

現在「調べ考える社会科」が求められている。児童は調べる活動に興味をもち、多様な調べ方ができるようになったものの、考える活動が十分に行われていないという実態がある。切実な問題をもたず、調べた内容の意味もよく分からずに調べたことを発表して終わる社会科学習では考える力は育たない。そこで、何をどのように調べ、どうやって考えさせればよいのか、そしてどのような見方・考え方を育てたいのかを教師が適切に把握し、指導する社会科学習を目指したいと考えた。

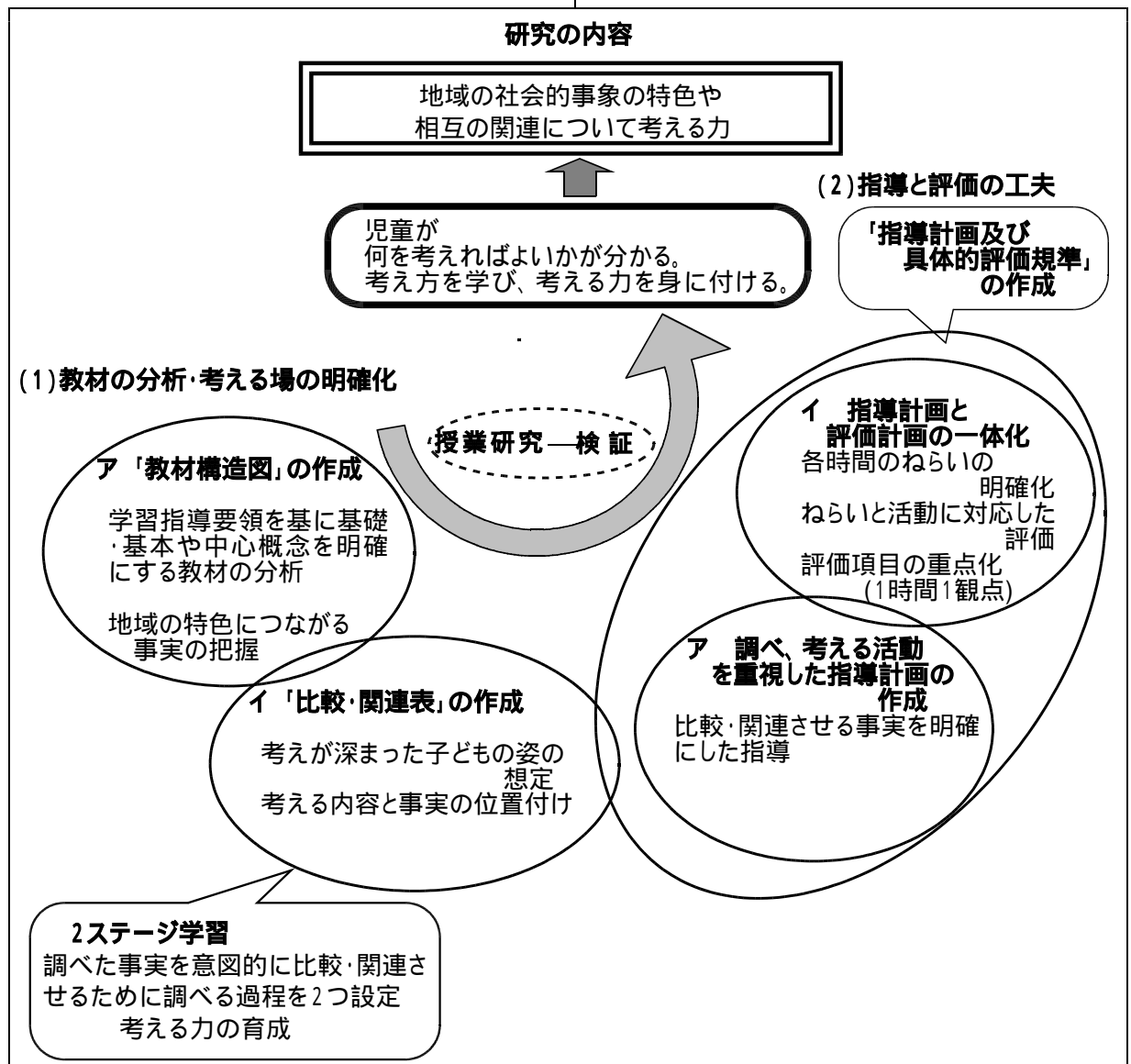
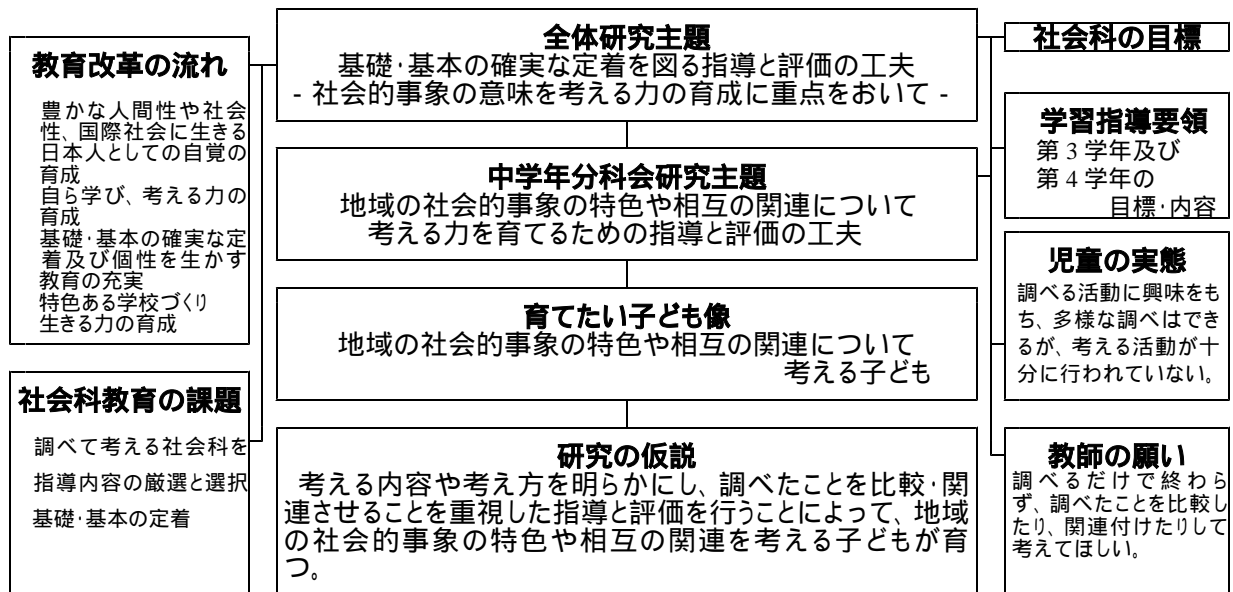
そこで、この研究のねらいを達成するために、単元ごとに、学習の対象となる社会的事象の特色や、関連する内容を明確にし、児童がどのような事実について調べ、どのように考えればよいのかを具体的に表すことを試みた。さらに、単元全体や各時間の評価規準を明確にするとともに、学習の途中や最終段階で導き出したい児童の考えを想定して評価に生かすことにした。最終的に「考えが深まった子どもの姿」に育てるには、途中の評価の結果を次の指導に生かすことが不可欠となる。必要な事実認識や考えを十分にもっていない場合には、個々に適切な指導・支援を行うことで、一人一人の児童の考えを深められると考えた。

以上のように指導と評価を一体化させ、考える力を育成することを目指して、本研究主題を設定した。

2 研究の仮説

考える内容や考え方を明らかにし、調べたことを比較・関連させることを重視した指導と評価を行うことによって、地域の社会的事象の特色や相互の関連を考える子どもが育つ。

3 研究構想図



4 研究の内容

(1) 教材の分析・考える場の明確化

児童の「考える力」を育てるためには、教師が児童に考えさせたい内容及び方法を明確にイメージできていることが必要である。そのためには、教材を分析し、複数の事実を関連付けて考えさせる場を設定した指導計画を立てることが有効であると考えた。中学年部会では、以下の2つの手だてから仮説の検証を試みた。

ア 「教材構造図」の作成（7ページ参照）

教師が児童に何をとらえさせたいのかを明らかにするために、学習指導要領の目標及び内容等から教材分析を行い、地域の特色を加味した教材構造図を作成することを考えた。本研究では、学習指導要領から比較的簡単な手順で作成できるようにするとともに、地域の特色を加味し、「考える内容」「事実」を比較・関連させた指導計画（比較・関連表）を作成するための資料となるような工夫を加えた。

教材構造図の作成手順は、以下の通りである。

単元における中心となる概念を、学習指導要領の内容（括弧付きの番号のもの）から明確化する。その際、実施学年や実施時期を考慮する。
学習指導要領の内容（ア、イ等）から、「調べる対象」を確認する。
「考える内容」については、学習指導要領解説から、 に関する部分を更に具体化する。
調べる際に着目する「社会的事象」を明確にする。

ここまでは、学習指導要領等から分析できる一般的な段階のものである。

取り上げる地域の特色を加味し、具体的に調べる対象となる「事実」を設定する。

中学年では、自分の住んでいる地域を通して学習を進めるため、各校ごとに地域の社会的事象を教材化することが必要である。そこで、「事実」は、一般的な事実に、地域の特色を加味した事実（丸囲みから矢印で示した部分）を加えたものとした。

イ 「比較・関連表」の作成（8ページ参照）

地域の社会的事象の特色や相互の関連について考える力を育てるためには、調べたことを比較・関連させる場を設け、比較・関連させるために必要な「考える内容」と「事実」を分析して単元を構成していくことが有効である。

なお、ここでいう「比較」とは、例えば、「精肉店の販売の工夫」と「青果店の販売の工夫」のように、同じ性質のものを比べて考える場合を指し、「関連」とは例えば、「消費者のニーズ」と「商店の販売の工夫」のように、違うものを関係付けて考える場合と定義した。

比較・関連させるものには、活動、資料、内容等が考えられるが、ここでは、これらを「考える内容」及び「事実」に含めた。「比較・関連表」の作成手順は、以下の通りである。

「考えが深まった子どもの姿」を、教材構造図の中心となる概念から想定する。
地域の教材から指導事例として取り上げる内容を決定し、比較・関連させる「考える内容」及び「事実」（教材構造図で設定したもの）を位置付ける。その際、児童にとって、より身近で具体的な内容を「つかむ過程」に設定するとよい。

児童に社会的事象を比較・関連させて考えさせるために、指導計画に「調べる学習過程」を二つ設定した。これを2ステージ学習と呼ぶことにした。つまり、ステージ（調べる）で身に付けた社会的な見方・考え方と調べる視点を生かして、ステージ（調べる）の学

習に取り組みさせるのである。学習のスキルアップという側面もあるが、本研究では、二つのステージで学習した内容を比較・関連させるために、2ステージの学習過程を設定した。

具体的には、「わたしたちのくらしと商店」の学習のように、一単元の中で2ステージの学習が可能な場合や大単元「安全なくらし」の学習のように、消防と警察の二つの小単元で2ステージの形をとる場合などが考えられる。

2ステージの形をとり、複数の事例を比較・関連させることで、学習が事実の把握で終わるのではなく、児童の考えがより一般化された概念形成につながる学習へと深めることができる。「調べ考える」学習活動を展開するためには、単に一つ一つの事実を比較したり、関連付けたりするだけでは「児童の考え方の例」や「考えが深まった子どもの姿」を導き出すことは難しい。それぞれの事実から児童の考えを引き出し、それを児童の言葉でまとめたものを比較・関連させることが重要となる。

そのための手だてとして、一つ一つの事実から「安い」「新鮮」などの共通項を見付けさせるだけではなく、「　　屋さんでは、お客さんに喜んでもらうために　　の工夫をしている」のように「人の姿が見える考え」としてまとめ、比較・関連させるようにする。なお、児童が比較・関連させて考えやすいように、特に中学年では、なるべく同じ言葉でまとめるなどの配慮が必要である。

以上のことから、「比較・関連表」は、調べ考える活動を重視した指導計画を作成するための資料として活用することができる。

(2) 指導と評価の工夫

ア 調べ、考える活動を重視した指導計画の作成（9，10ページ参照）

とらえさせたい事実を明確にし、それを比較・関連させることにより、中心となる概念を導き出すために指導計画を工夫した。そこで、「比較・関連表」を基に、指導計画上に「比較・関連」の欄を設け、考えさせる場を明確にし、どの学習過程でどの事実を比較・関連させるのかを、より具体的にした単元の指導計画を作成した。

イ 指導計画と評価計画（具体的評価規準）の一体化

評価は、児童への指導につなげるために行うべきものである。そのためには、各時間のねらいを教師がはっきりと把握し、児童の学習活動や発言をねらいに照らし合わせて、価値付けることが大切である。ねらいと活動に即した評価を行うために、指導計画と評価計画（具体的評価規準）を一体化した。

評価項目については、評価の観点の重点化を図り、一時間の中で最も評価を行いたい一観点のみを評価計画に位置付けた。また、学習活動に対応した評価方法を明記した。

これらの工夫により、児童の学習活動に対してより効果的な支援を行うことができる。

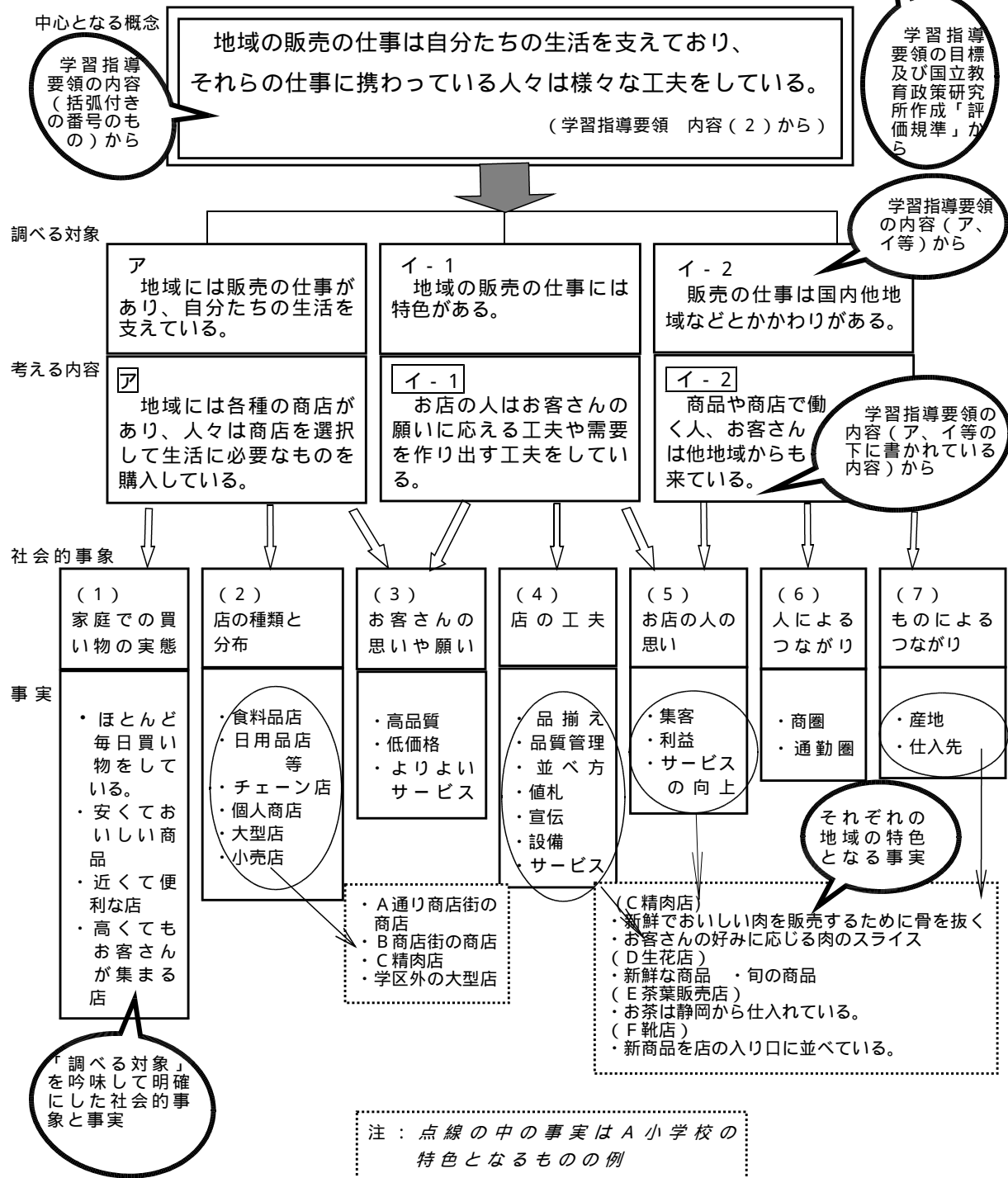
なお、具体的な評価規準が、単元レベルの評価規準と整合するよう、単元を通して評価項目に偏りが無いことに留意する必要がある。

以上のように、「教材構造図」を作成して教材の分析を行い、児童が「調べ考える」思考の流れを「比較・関連表」で明確にし、それを基に指導計画を立てることが、児童の「考える場」を確保できる学習過程の設定につながる。この一連の方法が、児童の「考える力」を育てるためには有効である。

5 実践事例（第3学年）

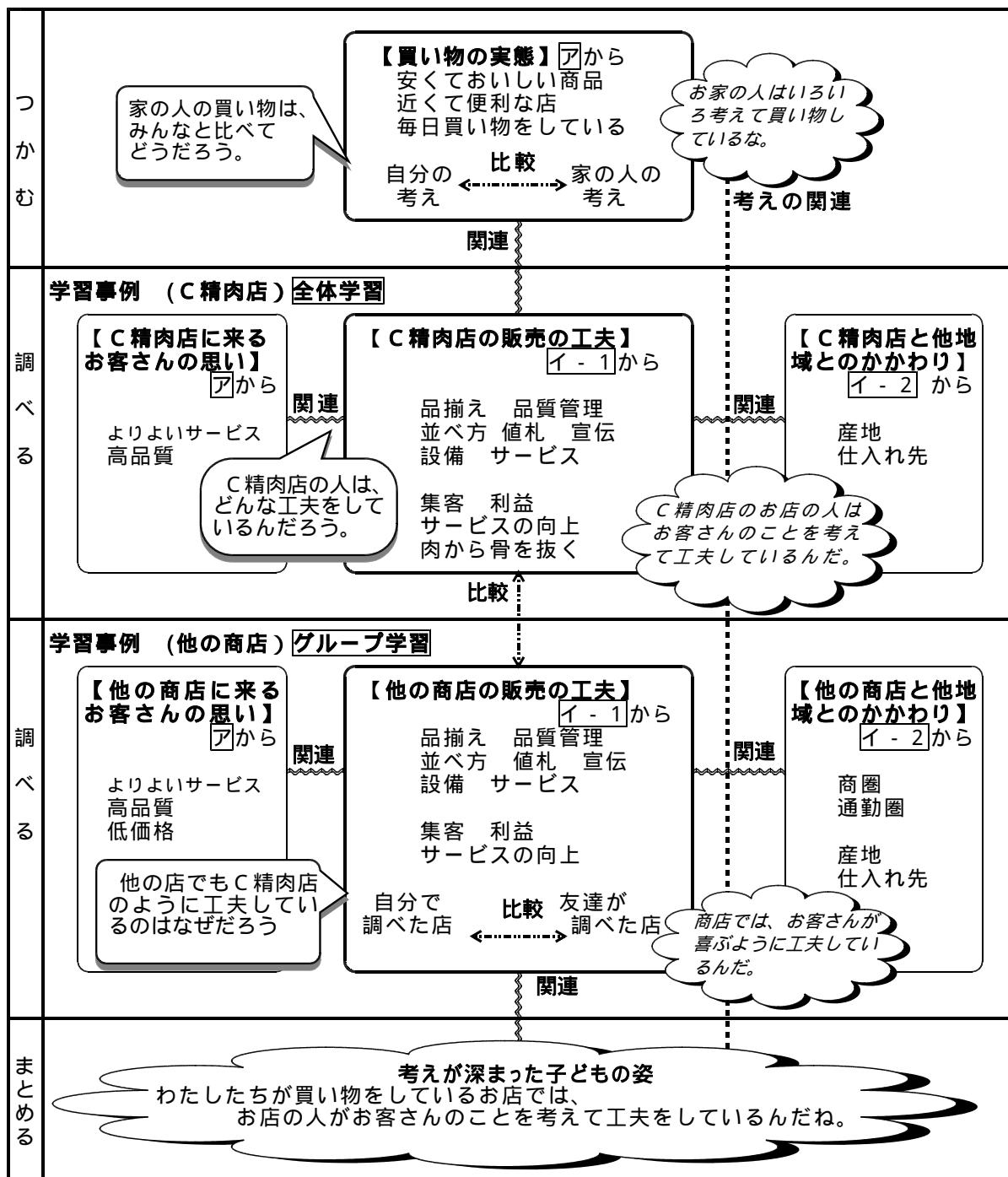
- (1) 単元名「わたしたちの暮らしと商店の仕事」
 (2) 教材構造図

態度	能力		理解
関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解
販売に携わる人々の様子に関心をもち、自ら働きかけて調べようとする。	販売に携わる人々は、消費者の願いに合わせて工夫していることを考える。	販売に携わる人々の工夫や働く人の思いを観察・調査して調べる。	販売の仕事には特色があり、販売の工夫をしていることがある。



(3) 比較・関連表

調べる対象
 ア 地域には販売の仕事があり、自分たちの生活を支えている。
 イ-1 地域の販売の仕事には特色がある。
 イ-2 販売の仕事は、国内他地域などとかかわりがある。



他単元との関連
 工場単元
 ・ 工場の仕事は様々な工夫をし、自分たちの生活を支えている。
 ・ 工場の仕事は地域によって特色がある。
 ・ 他地域とのかかわりがある。

(4) 指導計画及び評価計画（具体的評価規準）

3年「わたしたちの暮らしと商店の仕事」（1.5時間扱い）

学習過程	時	ねらい	主な学習活動 資料	考える内容 比較・関連させる事実 (丸数字は比較・関連表のもの) 考えさせたい内容	小単元レベルの評価規準 ()内は評価方法			
					関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解
					1 販売に携わる人の様子に関心をもち、進んで調べている。	1 学習問題について調べるための方法を考える。 2 見学、インタビューから販売に携わる人の思いや工夫について考える。	1 自分なりの予想を基に、見学やインタビューをして調べている。 2 調べて分かったことを分かりやすく表現している。	1 わたしたちの住んでいる地域には販売の仕事があり、それらは自分たちの生活を支えていることが分かる。 2 地域の販売の仕事に見られる特色が分かる。
					具体的評価規準			
つかむ 2時間	1	買い物に関心をもち、家の人の思いに気付く。	買い物の経験について話し合う。 話し合ったことを図にまとめる。		1 買い物に関心をもち、進んで発表している。(発言)			
	2	家の人は思いや願いをもって買い物していることが分かる。	家の人が食料品を買うときに気を付けていることを発表する。 家の人の思いをワークシートにまとめる。	【買ひ物の実態】 安くておいしい商品、近くて便利な店 小売店、チェーン店 おうちの人はいろいろ考えて買い物しているな。				1 買う人は、いろいろな思いや願いをもってしている。(ワークシート)
調べる 6時間	3	「C精肉店」に関心をもち、消費者の願いにこたえる工夫を予想する。	「C精肉店」についての事実を知り、お店にお客さんがたくさん来る理由を考える。 写真(店内の人、店構え、店内の様子、肉の仕込み)写真(店内の様子)4人で1枚 C精肉店にお客さんがたくさん来るひみつを調べよう。 店の写真を見て気が付いたことを発表する。 予想を立てて発表する。	【I精肉店の販売の工夫】の予想		2 資料を基に、お店にお客さんがたくさん来る理由を予想している。(ワークシート)		
	4	前時の学習を基に、見学の視点をもつ。	予想を確かめる手だてを考え、見学の計画を立てる。 調べる方法を発表し合い、調べ方を共有化する。			1 調べる方法を考えている。(発言)		
	5	自分たちが立てた計画に沿って見学する。	見学の計画に沿って「C精肉店」の様子を調べ、分かったことを書く。					1 計画に沿って見学し、分かったことを書いていく。(ワークシート)
	6	見学したことを基に、お客さんがたくさん来る秘密が分かる。	見学カードからワークシートの「分かったこと」の欄に書き写す。 ワークシートに、見学して考えたこと、思ったことを書く。 疑問や分かったことについて話し合う。	【C精肉店の販売の工夫】 品揃え、品質管理、並べ方、値札、宣伝、設備、サービス 【C精肉店と他地域とのかかわり】 仕入れ先				1 「C精肉店」で働く人の思いや工夫を理解している。(ワークシート)
	7	「C精肉店」で働く人の思いに目を向けて、販売の工夫を考える。	VTRを見て、分かったことを発表する。 VTR(仕込みの様子、お客さんの対応) VTRを補足する教師の話を書く。 「C精肉店」に来るお客さんの話を聞く。 お店の人の工夫を考える。 お店の人にお礼のお手紙を書く。	【C精肉店の販売の工夫】 集客、利益、サービスの向上 【C精肉店に来るお客さんの思い】 品質、価格 C精肉店のお店の人はお客さんのことを考えて工夫しているんだ。		2 「C精肉店」を見学して分かったこと、VTRを見て分かったことを関連付けて販売の工夫を考えている。(手紙)		
	8	「C精肉店」の販売の工夫をお店の人の立場に立って表現する。	「C精肉店」のポスターにどんな言葉を入れるか考える。 「C精肉店」を宣伝するポスターをかく。					2 商店で働く人の販売の工夫が分かるように表現している。(ポスター)

(前ページより続く)

学習過程	時	ねらい	主な学習活動 資料	考える内容 比較・関連させる事実 (丸数字は比較・関連表もの) 考えさせたい内容	具体的評価規準				
					関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解	
調べる 6時間	9	「C精肉店」で学んだことを基に他の商店の販売の工夫を予想する。	店の写真を見て調べたい店を決める。 写真(店構え・8軒) ・D生花店・E茶葉販売店・F靴店 ・Gホームセンター・H雑貨店・I薬局 ・J青果店・K煎餅店 お客さんを集めるための工夫を予想する。 他のお店では、お客さんを集めるためにどのような工夫をしているのか調べよう。	【他の商店の販売の工夫】の予想 C精肉店の販売の工夫 ~		2 「C精肉店」で学んだことを基に、販売の工夫を予想している(ワークシート)			
	10	他の商店の販売の工夫について調べる計画を立てる。	グループで調べる計画を立てる。	【他の商店を調べる視点】 C精肉店を調べた視点 ~		1 前の学習を生かして、調べる視点や方法を考えられている。(発言)			
	11	グループごとに計画に沿って見学する。	それぞれの商店を計画に沿って観察、取材する。				1 計画に沿って見学し、分かったことを書いている。(ワークシート)		
	12	自分が調べた商店の販売の工夫について理解を深める。	見学カードから、ワークシート下の分かったことの欄に書き写す。 グループで見学して分かったことを話し合う。 項目ごとに整理し、発表会の準備をする。 ・種類・並べ方・値札・宣伝・仕入先 ・お店の人の接客態度・サービス・そのほか 作品の発表会をする。	【他の商店の販売の工夫】 【他の商店と他地域とのかかわり】 商圏、通勤圏				2 自分が調べた商店の人の思いや工夫を理解している。(作品)	
	13	自分が調べた商店の販売の工夫を分かりやすく発表する。	発表を聞いて分かったことをまとめる。 ワークシート				2 商店で働く人の販売の工夫を分かりやすく表現している。(発表)		
	14	お客さんの思いを関連させて、商店の販売の工夫を考える。	自分が調べた商店に来るお客さんの思いを発表する。 それぞれの商店の販売の工夫を考え、お店を宣伝するキャッチフレーズを決める。 お店の人へお礼の手紙を書く。	【他の店に来るお客さんの思い】 【他の商店の販売の工夫】 商店では、お客さんが喜ぶように工夫しているんだ。		2 お客さんの思いと商店の販売の工夫を関連させて手紙の内容を考えている。(手紙)			
	15	販売の仕事が自分たちの生活を支えていることが分かる。	お店の人の工夫と買う人の願いが関連していることを理解し、学習のまとめをする。	わたしたちが買い物をしているお店では、お店の人がお客さんのことを考えて工夫をしているんだね。				1 わたしたちの地域の販売の仕事は自分たちの生活を支えていることが分かる。(ワークシート)	

(5) 考察

ア 教材の分析・考える場の明確化について

(ア) 教材構造図に基づく素材の選択

教材構造図の作成によって、中心となる概念が明らかになり、それを導く地域の社会的事象の含まれた素材（C精肉店）を選定できた。選定した理由は以下の三点である。

- ・お店の人の思いとお客さんの思いが顕著に反映されている店である
- ・個人商店であるためお店の人との密接なかかわりから販売の工夫がとらえさせやすい
- ・学区内にあるため、保護者や児童自身も利用している

教材構造図に基づいて素材を選定したことで、児童に自分たちの生活を支えている商店の販売の工夫をつかませやすかった。

(イ) 「比較・関連表」に基づく同質の事実の比較の有効性

また「比較・関連表」の作成によって、教材構造図の事実を学習過程にどのように位置付けるかが明らかになった。「考えが深まった子どもの姿」にせまるためには、「C精肉店の販売の工夫」と「他の商店の販売の工夫」など同質の事実を比較させることが有効であると考えた。

A児の事例

【学習過程「調べる」】...C精肉店

肉から骨を抜く作業を店でしてすごいと思いました。その理由は店ですぐに骨を抜いたりして、お客さんの相手をしてとても大変そうだなと思いました。

【学習過程「調べる」】...E茶葉販売店

種類のことや仕入れ先のことがよく分かりました。そのことを参考にしてポスターや発表がうまくできました。ぼくも、E茶葉販売店の工夫や商品の種類が分かって、E茶葉販売店はとてもよい店だなと思いました。これからもE茶葉販売店の仕事をがんばってください。

【「調べる」と「」の比較】

C精肉店では、肉から骨を抜く作業やお客さんの注文を聞いて、こんなことをしてもうかるのかなと思いました。お店はいろいろな工夫をして、お客さんに喜んでもらうために工夫をしていることが、お店のことを調べてよく分かりました。（二つのお店を比べて）工夫では、ほかの商品も売っていたり（お客さんのニーズに合わせた品ぞろえ）、サービスで骨を抜くことや量り売りをしてくれるお店がお客さんがよく集まる店だと思いました。（だから）ぼくもお店の勉強をして、今度何か買うときに工夫をしようかなと思いました。

A児は、学習事例（C精肉店）の販売の工夫と、学習事例（E茶葉販売店）の販売の工夫を比較することで、「お店はお客さんを集めるために工夫している」という共通項を導き出し、販売の工夫を一般化することができた。調べ、考える力を育てるために同質の事実を比較させることが有効であった。

(ウ) 異なる性質の事実の関連

商店の販売の工夫をより深く考えさせるために、逆の立場のお客さんの思いを関連付けることが有効であると考えた。商店の見学では、品物の並べ方や、商品の種類などの目に見え

る販売の工夫を調べることはできるが、お店の人の思いやお客様の思いなどを含めて販売の工夫をとらえることは難しい。そこで次のような資料を提示し、「販売の工夫」とは異なる視点である「消費者のニーズ」を結び付けて考えさせることとした。

() 肉の仕込みやお客様への対応などの様子分かる VTR

() C 精肉店に買い物に来るお母さんの話

B 児の事例

【学習過程「調べる」】

C 精肉店は高くても、おいしい肉がいっぱいあるからお客様がたくさん来るといことが分かりました。100グラムでも150グラムでもいいのが分かりました。お客様の注文を聞いてくれる人なんて、初めて分かりました。

B 児は、見学のときは、肉の値段について調べた。見学前の予想では、安いからお客様がたくさん来ると考えていたが、他店のチラシを参考にこの店の肉の値段を調べたところ、予想に反して安くはなかった。しかし、見学後の二つの資料を基に、消費者の思いとお店の人の工夫を関連付けることで、この店は安くはなくても、お客様がたくさん来ることに気付いた。販売の工夫をとらえさせるためには、お客様の思いに触れさせることが有効であったと考えられる。

「調べる」では、「」のような手だてが不足していたため、児童にとってお客様の思いとお店の販売の工夫のように異なる性質の事実を関連させることが難しかった。教師の発問や提示する資料などの吟味が必要である。

イ 指導計画と評価計画（具体的評価規準）の一体化

「教材構造図」の考える内容から「比較・関連表」で児童の思考の流れを想定したことにより、評価計画に「思考・判断」の観点を適切に位置付けることができた。また、一時間のなかで、最も評価を行いたい一観点のみを評価計画に位置付けることで、児童一人一人の見取りを適切に行うことができ、それにより児童への指導につなげる評価をすることができた。

「調べる」の商店の販売の工夫を作品にまとめていくときに、児童の学習の達成状況を見取り、調べたことに対しての考えの深まりが不十分な児童に対して次のような支援をした。

	支援を行う前の児童の記述	教師の支援	学習後の児童の記述
C 児 F 靴店	毎日並べ方を変えている。	「なぜ変えているのか？」	新しいものが入ったか分かるように毎日並べ方を変えている。
D 児 H 雑貨店	なべとかの並べ方はきれいだった。	「どのようにきれいだったのか？」	並べ方は大中小で分けて並べてあった。

指導計画と評価計画の関連を図り、評価の観点を一時間一観点にしたことで、教師は児童の考えや視点が、ねらい達成につながる考えや視点なのかをその場で判断しやすくなった。このことから一時間一観点の評価は、指導と評価の一体化を行う上で有効だったといえる。

課題としては、一時間一観点にしたため、「関心・意欲・態度」に関する評価項目を設定できたのが一時間しかなかったことが挙げられる。「比較・関連表」から「指導計画および評価計画（具体的評価規準）」を作成する段階で評価規準の四観点をできるだけ均等に設定する必要がある。

6 研究のまとめ

研究仮説「考える内容や考え方を明らかにし、調べたことを比較・関連させることを重視した指導と評価を行うことによって、地域の社会的事象の特色や相互の関連を考える子どもが育つ」を設定し研究を進めた結果、全体として多くの成果が得られた。反面、個に応じた指導や「思考・判断」以外の評価観点との関連について課題が残った。

(1) 研究の成果

ア 教材の分析・考える場の明確化

児童に「考える力」を育てるためには、教師が考えさせたい内容と方法を明確にもっていなければならない。手だてとして、教材構造図、比較・関連表、指導計画・評価計画の作成という三段階の教材分析と2ステージ学習の設定を試みた。その結果、教師が児童に考えさせる内容及び方法、調べ学習の位置付けをしっかりと把握して学習指導を展開することができた。さらに、考える場と考えが深まった子どもの姿を想定して指導計画・評価計画に位置付けることができたので、考えさせる方法や場を明確にすることができた。このことにより、児童は、どこで何をどのように考えればよいのかが分かり、考える態度が育ってきた。

イ 指導と評価の一体化

指導と評価の一体化を図るために、一時間の中で最も評価を行う必要のある一観点を絞り込み、評価計画に位置付けた。その結果、教師は、児童の学習活動や発言がねらいに即しているかを焦点化して、その場で見取ることができた。また、上記の三段階の教材分析は評価の観点を絞り込むのにも有効であった。授業の中で、児童の学習がねらいに達していない場合には、どのような支援を行うのかを具体的に想定したことや、ねらいに達している児童には認めて他の児童の参考になるように価値付けたことが、児童の考える活動に結び付いた。

(2) 研究の課題

ア 教材の分析・考える場の明確化

上記のような三段階の教材分析を試みたが、この方法が誰にとっても活用しやすいものであるかさらに検討していきたい。また、指導計画・評価計画表で、考える場の明確化を位置付けたが、どの子にとってもその場所が最適であるかの検証も必要である。一人一人に合った考える場の設定をどのように行っていけばよいのかが課題として残る。

イ 指導と評価の一体化

指導計画・評価計画表の作成により、クラス全体として考える場の設定や支援の方法はある程度明確になった。しかし、一人一人の児童の見方・考え方のよさや意味をねらいに沿って十分に見取ることができたとは言えない。教師が一人一人の児童の考えを基に、ねらいに沿って整理し、関係付けて価値付けるためには、さらに具体的に計画する必要がある。

(3) 今後の方向性

社会科の目標である「公民的資質の基礎を養う」ためには、「理解、態度、能力に関する目標を統一的に身に付けることが重要である」ことを受け、考える活動の充実を、児童が主体的に学習に取り組む態度、地域における愛情・自覚を育てる学習に結び付けていくために、指導計画及び評価計画をどのように工夫していくか、という視点から本研究を発展させていきたい。

高学年分科会 高学年分科会研究主題

社会的なものの見方や考え方を育てる指導と評価の工夫 ～自己評価力の育成を通して～

1 高学年分科会主題設定の理由

高学年分科会では全体研究主題を受けて、基礎・基本の確実な定着を図ることを目指し、学習指導要領にも明記されているように、「児童が自ら学び自ら考える力」を育成することが重要であると考えた。そのためには、児童の主体的な学習を一層重視する必要がある。児童が主体的に学習を進めるためには、社会的事象の意味や働きなどを考える力を育てることが大切である。

高学年の児童の実態を考えてみたとき、インターネット等の普及により、情報収集が容易になり社会的事象について調べることは興味をもって取り組むようになってきている。しかし、事実をありのままにとらえることはできても、社会的事象の意味についてまで考える力をもった児童は少ない。

そこで、高学年分科会では、社会的事象の意味について考える力をはぐくむために、まずその手段となる「社会的なものの見方や考え方」を育てる必要があると考えた。「社会的なものの見方や考え方」は、「社会的事象を多面的に見たり、比較・関連・総合して見たり、考えたりすること」ととらえた。

社会的なものの見方や考え方を育てるためには、指導者が個々の児童の見方や考え方を丁寧に評価し指導に生かしていくことが必要である。しかし、「考える」という活動は、児童それぞれの内面的な活動であり、指導者として、児童が何について、どのように考えているかという状況を把握することは難しい。

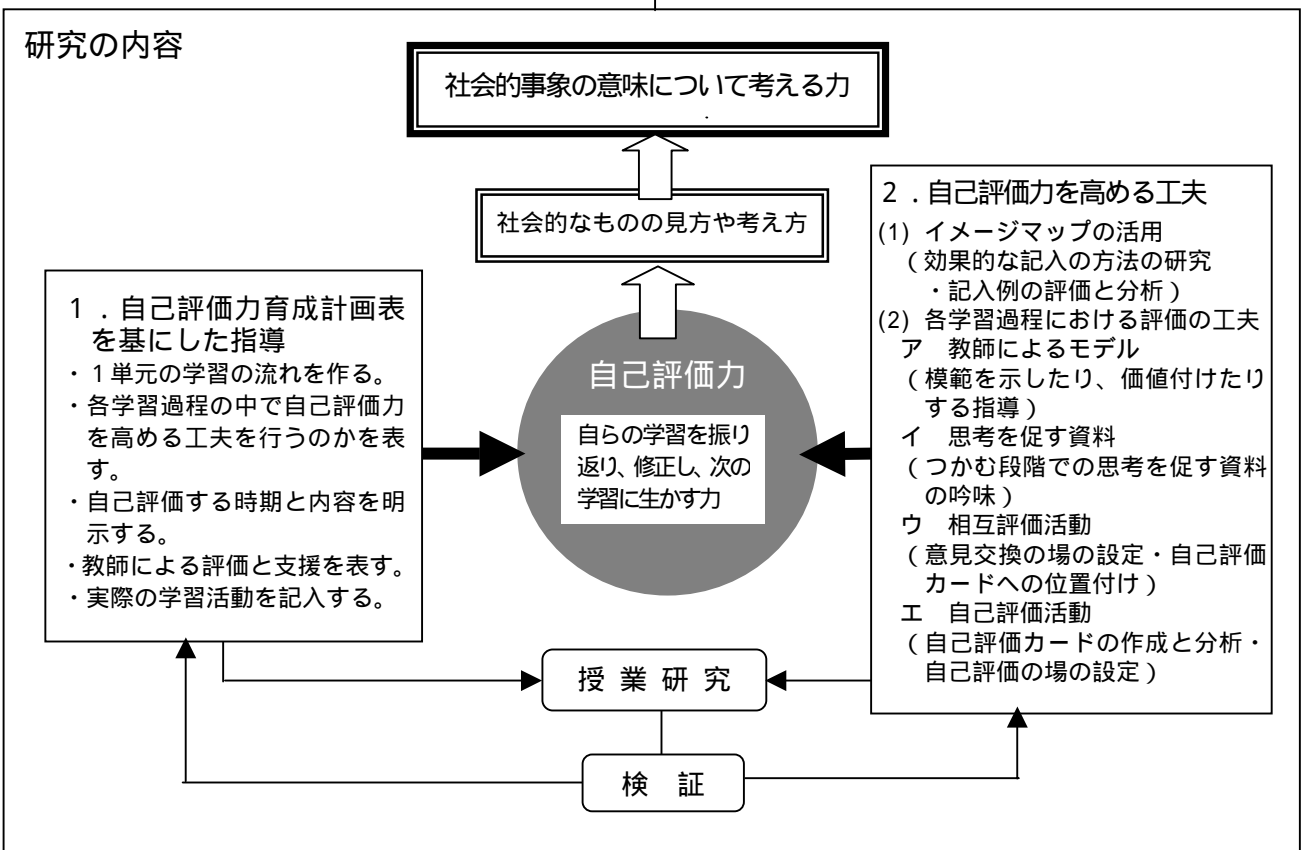
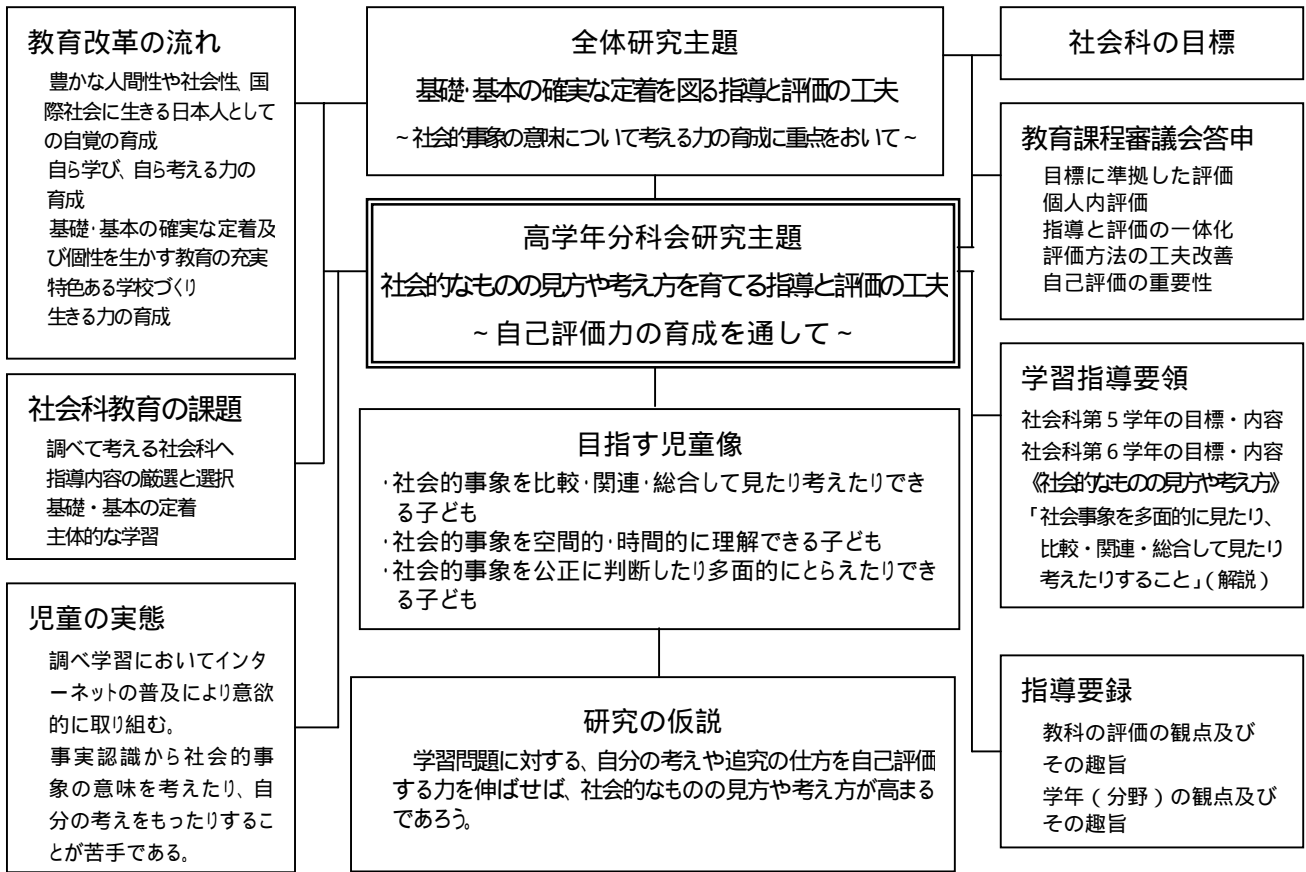
高学年分科会では、指導者として児童の「考える」状況を的確に把握するとともに、学習者としての児童が自らの「考える」状況を把握し、効果的に学習に位置づけていくこと、つまり、児童に「自らの学習を振り返り、修正し、次の学習に生かす力」を育てることが研究主題に迫るために必要なことではないかと考えた。本研究では、「自らの学習を振り返り、修正し、次の学習に生かす力」を「自己評価力」と位置づけ、指導者による評価と併せて、「自分は学習問題を的確にとらえているか」「事実に基づいて考えているか」「学習問題の解決に近づいているか」「問題の解決に向けて次は何について調べていくべきか」などの視点を与えて自己評価する活動を繰り返させ、自己評価力を伸ばすことで、社会的なものの見方や考え方が高まっていくものと考えた。

以上の理由から高学年分科会の主題および副主題を設定した。

2 研究の仮説

- ・自分の考えや追究の仕方について自己評価する力を伸ばせば、社会的なものの見方や考え方が育つであろう。

3 研究構想図



4 研究の内容

(1) 自己評価力育成計画表を基にした指導

児童の自己評価力を育てていくためには、一単元の学習を通じて自己評価力を育成していくための計画表を作成し、計画的に指導していく必要があると考えた。自己評価力育成計画表の作成手順は以下の通りである。

一単元の学習の流れを「つかむ（予想し学習問題を理解する）」 「調べる（学習問題について追究し、事実を明確にする）」 「まとめる（事実と事実を関連付けて総合的に考える）」とする。（* 参照）

各学習過程の中で行う自己評価力を高める工夫を表す。（* 参照）

自己評価活動についても、「いつ」「何を」自己評価するのかを表す。（* 参照）

自己評価している児童の姿を想定し、教師の支援についても明示する。（* 参照）

活用する際には、学習活動に「実際の学習活動」を記入する。（* 参照）

学習過程 *	学習活動 (は主な学習活動)	* 自己評価する事柄 (考えと追究の仕方に重点をおいて)	* 教師による支援と評価 (支援の内容 評価規準)	* 自己評価力を高める工夫				
				イメージマップの活用	自己評価活動	相互評価活動	教師によるモデル	思考を促す資料
つかむ	予想し、学習問題を理解する	学習問題が理解できたか。 予想し、その理由も考えることができたか。 友達の考えのよさを見付けたり、自分の考えを見つめ直したりすることができたか。	学習問題が理解できている 予想とともに理由もいっしょに考えている。 資料の見方や既習事項を思い出させる。 友達のよいところを取り入れて修正したり、補足したりしている。 友達の考えで共感できるところを取り入れるように促す。	↓	↓			
	修正・確認の場							
調べる	学習問題について追究し事実を明確にする	自分の調べていることは、学習問題から離れていないか。 自分の選んだ方法で学習問題は解決できそうか。	学習問題から離れずに追究したり、学習問題から離れてしまったことが分かり修正したりしている。 学習問題を意識させ、助言していく。 自分の追究の仕方が適切であるかどうか判断できている。 調べた事実をしっかりとらえ、他との比較や関連も考えながら進めている。 友達のよいところを取り入れて修正したり、補足したりしている。 友達の考えで共感できるところを取り入れるように促す。	⇓	⇓			⇓
	修正・確認の場	友達の考えのよさを見付けたり、自分の考えを見つめ直したりすることができたか。						
まとめる	事実と事実を関連付けたりして総合的に考える	学習問題が解決できたか。 調べたことを分かりやすくまとめて、発表できたか。 友達の考えのよさを見付けたり、自分の考えを見つめ直したりすることができたか。	まとめるときに、事実と事実を比較・関連・総合して考えている。 イメージマップを振り返らせ、もう一度考えさせる。 作品は事実の羅列だけではなく、その意味にまでふれて考えている。 自分の考えが表れているか振り返らせ、考えさせる。 友達のよいところを取り入れて修正したり、補足したりしている。	⇓	⇓			⇓
	総合的な自己評価							

は最重点 は重点 → は継続 ⇓ は個別

(2) 自己評価力を高めるための工夫

ア イメージマップの活用

児童の自己評価力を育成していくためには、学習中の思考の筋道を残していく手段が有効であると考えた。自らの思考の筋道を振り返ることで、自己の学習の良い点や課題を見付け、その後の学習の方向性を見定めることができる。

高学年分科会では、児童が調べた事実だけでなく、学習問題を解決する過程で立てた予想やその根拠・考えたことなども1枚の紙に配置していくイメージマップを考えた。学習問題を中心に位置づけ、予想や根拠・調べた事実・考えたことなどを書き表し、関連するものは線で結んでいく。こうして構成されていくイメージマップには、学習問題に対する自己の思考の筋道が言語化、図式化され見渡せるようになる。これは学習の過程を振り返り、その後の学習方法を修正したり、学習の見通しをもって取り組んでいったりするための有効な手段となる。また、指導者にとっては児童一人一人が「どのような考えをもって追究しているか」「学習内容や方法が課題からそれていないか」を確認し、その後の指導にフィードバックしていく際の手がかりともなる。なお、一つの学習問題で1枚のイメージマップを作成する。

～イメージマップ作成の手順～

学習問題を決め、中心に置く。学習問題に対する予想とその理由を考え記入する。

調べる活動において分かった事実や自分の考えを書き込んでいく。関連するものを線で結ぶ。完成したイメージマップにキャッチフレーズを付ける。また、なぜそのキャッチフレーズにしたかの理由を書く。

記入の仕方

自分の予想

予想のわけ

調べる段階で分かった事実

自分の考え

—— は関連したもの (他者から参考にしたものは赤で記入する)

～イメージマップ活用の利点～

- ・自分の考えを自由に記入できる。
- ・言語化、図式化することで頭の中であいまいであったことを整理できる。
- ・事象と事象の関連を明確にできる。
- ・学習問題を中心に置くことで調べる内容や思考がそれてしまっても、学習問題を確認することができる。
- ・1枚の紙に書き表されているので、学習の全体像を把握できる。
- ・現在何について学習しているか、足りないことや修正すべきことは何であるかを把握しやすく、見通しをもって学習を進めることができる。

～イメージマップから把握できる力～

学習過程	把握できる力 把握できる視点	関心・意欲・態度	思考判断	技能表現	知識理解
つかむ	論理的に考える力 理由を付けた予想を立てている。学習問題に正対している。	↓			
調べる	情報を収集する・取捨選択する力 学習問題と関わりのある情報をたくさん書いている。				
	情報を加工処理する力 簡潔で分かりやすい言葉になっている。				
	論理的に考える力 学習問題と関わりのある事象を関連付けて書いている。				
まとめる	学習問題に正対して、総合的・多面的に考える力 キャッチフレーズから学習問題から離れずに、調べたこと同士を結び付けて考えた「キャッチフレーズ」「その理由」になっている。				

イ 各学習過程における評価の工夫

学習過程	自己評価力を高める工夫				
	イメージマップの活用	自己評価活動	相互評価活動	教師によるモデル	思考を促す資料
つかむ	↓	↓			
調べる	↓	↓	↓		
まとめる	↓	↓	↓		

(フ) 教師によるモデルの提示（つかむ段階）
 教師によるモデルの提示とは、「社会的なものの見方や考え方」の模範を示すことである。モデルの示し方としては、教師が直接【模範を示す】・児童の発言や記述の中から「事実を正しくとらえているもの」「比較関連して考えているもの」「これまでの学習に基づいて考えているもの」などを全体の場で取り上げて【価値付ける】という方法が考えられる。時期とすれば、単元の序盤に重視し、さらに児童の活動の中で把握し、児童に意識させるようにしていく。これらを繰り返すことによって社会的なものの見方や考え方が育ち、ひいては社会的事象の意味についての考え方を自己評価できるようになっていくものと考えた。

(イ) 思考を促す資料（つかむ段階）
 社会的なものの見方や考え方に対する自己評価活動を活発にするためには、子どもたちの心を刺激し、様々な思考を促す資料に導入段階で出会わせることが必要不可欠である。
 またここで示される資料は、子どもたちの生活経験が生かされるもの、これまでの学習が生かされるもの、多様な考えが導き出されるものであることに留意していくことで、より活発な自己評価活動が行われるものと考えた。

(ウ) 相互評価活動
 a.（つかむ段階 学習問題に対する予想を立てる場面）
 学習問題に対する予想を立てる場面では、必ず個々の予想や考えを発表し、話し合う場を設けることにした。これにより、調べる内容をより具体的に把握すると同時に、より多様な考えにふれることで、自分の考えを確かめたり、自分にはなかった視点に気付いて考えの修正を行ったりといった「社会的なものの見方や考え方」にかかわる自己評価活動が活発になるものと考えた。

b.（調べる段階 調べ活動を進める中で）
 調べ学習を進める中で、お互いの学習進度や学習の仕方についてイメージマップを見合い、助言や感想を伝え合うなどして交流することで、自分のよさや足りない部分に気付いたり、友達のよさや考えを自分に取り入れたりして軌道修正させていく。また、中間発表会などを取り入れて、友達の考え方や調べ方を知り、自分の活動について振り返る機会をもたせる。

(I) 自己評価活動（毎時）
 自己評価力を育成していくためには、具体的な自己評価場面の確保が必要である。仮説に基づき、自分の考えと追究の仕方を振り返る自己評価カードを準備した。この自己評価カードは自己評価力育成計画表の各学習過程に沿った項目を立てた。また、学習の振り返りを、次の問題解決的な学習に生かせるよう、各過程の最後に、記述による自己評価も行わせることとした。また、教師が一人一人の児童の学習状況を見取り、指導助言を与える目安にもなるものと考えた。

自己評価カード
 イメージマップを見て自分の学習について振り返ろう！（60分程度）

単元名： _____

項目	自分で振り返る項目	◎	○	△	□	◎	○	△	□
つかむ	<input type="checkbox"/> 学習問題がわかった。								
	<input type="checkbox"/> 自分で予想を立てることができた。								
	<input type="checkbox"/> 自分の学習のわが言えることができた。								
	<input type="checkbox"/> 友達や先生の考えを見つけた。自分の考えと異なるところを明らかにすることができた。								
調べる	<input type="checkbox"/> 自分の調べていることと学習問題が関係している。								
	<input type="checkbox"/> 自分が調べた調べ方で学習問題は解決できた。								

自分へ _____

5 実践事例

(1) 単元名 「明治維新をつくりあげた人々」(第6学年)

(2) 基礎・基本について

学習指導要領の内容	能力			理解
	態度	思考・判断	技能・表現	
我が国の歴史上の主な事象にかかわる人物の働きに関心をもち、意欲的に調べ、考えながら追究している。 我が国の歴史や伝統を大切に、国を愛する心情をもとうとする。	歴史上の主な事象にかかわる人物の働きについて問題意識をもち、学習の見通しをもって、追究、解決している。 歴史上の主な事象にかかわる人物が、我が国の国家・社会の発展に果たした役割を考える。	歴史上の主な事象にかかわる人物の働きを具体的に調査し、地図や年表などの各種の基礎的資料を効果的に活用し、調べたことを目的に応じた方法で表現する。	我が国の歴史は、様々な課題の解決や人々の願いの実現に向けて努力した先人の働きによって発展し、今日の自分たちの生活が、先人の生活と深くかかわっていることを理解する。	
江戸末期から明治初期にかけての人々の暮らしの移り変わり、近代国家をつくるために影響を及ぼした人物の働きについて関心をもち、追究しようとしている。	自分なりの予想を立てて、資料をもとに根拠をもって学習問題を追究し、日本が近代化していった様子について考える。 近代国家をつくるために、影響を及ぼした人物の働きや、当時の人々の願い、明治政府が行った諸改革の意味について考える。	江戸末期から明治初期にかけての人々の暮らしの移り変わり、近代国家をつくるために影響を及ぼした人物の働き、明治政府が行った諸改革について具体的に調査し、年表などの各種の資料を効果的に活用して調べる。 資料で調べたことや自分で考えたことを分かりやすく表現する。	江戸末期から明治初期にかけて、我が国は、諸改革を行い、欧米の文化を取り入れつつ近代化を進めていったことを理解する。	

(3) 単元の目標

江戸末期から明治初期にかけて、新しい世の中をつくりあげようとした人物の働きに関心をもち、資料を活用して人物の働きを中心に黒船来航から国会開設までの事象と関連付けて調べ、近代国家をつくるために影響を及ぼした人物の働きについて考えるとともに、欧米の文化を取り入れつつ我が国が近代化を進めていったことを理解する。

(4) 評価計画

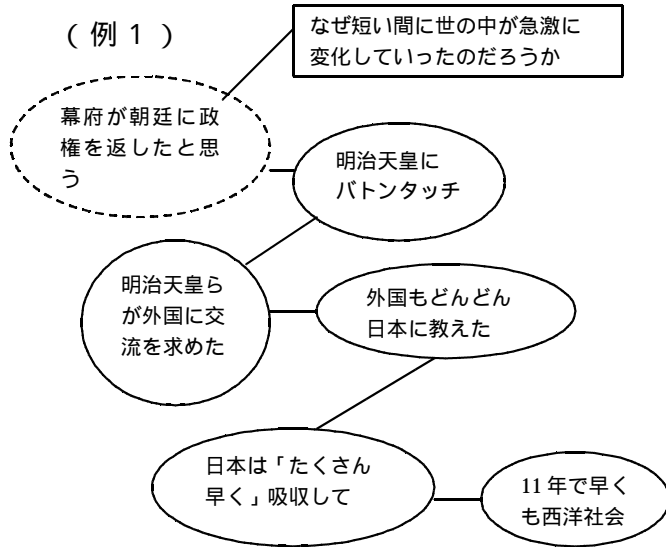
学習過程	ねらい	主な学習活動() 資料() 学習課題 自己評価力を高める工夫	評価規準(番号は単元の基礎・基本を参考のこと)			
			ア 社会的事象への関心・意欲・態度	イ 社会的な思考・判断	ウ 観察・資料活用 の技能・表現	エ 社会的事象についての知識・理解
つかむ 1時間	文明開化により、西洋風の様々文化が日本に入ってきたこと、社会が急激に変化していったことに気付く。 江戸末期と明治初期の日本の様子を比較し、短期間に急激な変化が起こった理由について自分なりの予想を立てる。	文明開化により、西洋風の様々な文化が日本に入ってきたことに気付く、自分なりの予想をもつ。 なぜ短い間に世の中が急激に変化していったのだろうか。 教師によるモデル 「アンペール幕末日本絵図」 東京名所寿留賀町三ツ井店両側富嶽眺望図 思考を促す資料 自己評価活動	2枚の絵を比較し、人々の様子や町の様子などに注目して見て、短期間で急激に世の中が変化していったことに関心をもち、 【ア 発言・ワークシート・イメージマップ】	2枚の絵を比較して見て、なぜ短期間に世の中が急激に変化していったのかを考え、自分の学習問題をもとに、予想を立てる。 【イ ワークシート・イメージマップ】	年代の異なる2枚の絵を比較し、明治になって変わったもの、新しく生まれたものを見つける。	2つの資料を見て、「比較したり、既習の学習を生かしながら発言している例」を取り上げてモデルとして示す。
調べる 4時間	近代国家をつくるために、新しい政治の進め方をめぐって活躍した人物の働きについて調べる。 明治政府が進めた諸改革と、それを進めた人々の働きについて自分なりの考えをもつ。	なぜ世の中が急激に変化していったのかについて調べ、自分なりの考えをもつ。 イメージマップの活用 相互評価活動 本単元で登場する人物の写真や絵を黒板に掲示し、提示する際に、一言エピソードを付け加える。 本単元に関する資料コーナーを設置する。 自己評価活動	近代国家をつくるために、誰が世の中にもどどのような影響を与えたのか調べようとしている。 【ア ノート・イメージマップ】	予想を確かめるために、誰がどのようにして明治の新しい世の中をつくっていったのか、資料をもとにして考える。 【イ ノート・イメージマップ】 近代国家をつくるようにした人物の働きについて考える。 【イ ノート・イメージマップ】	教科書や資料集などの資料を中心に、調べた人物の働きと明治政府が進めた諸改革について調べ、自分の考えたことをスピーチ原稿にまとめる。 【ウ ノート・スピーチ原稿】	明治の新しい世の中をつくるようにした人物の働きが分かる。 【エ スピーチ原稿 イメージマップ】 イメージマップをもとに友達と交流すること、自分の学習の軌道修正を行う。
まとめる 2時間	明治政府が進めた諸改革と人々の働きとのかかわりを関連付けて考え、急激に世の中が変化していった様子が分かる。	近代国家をつくるために活躍した人物の働きについてのスピーチを知り、社会の仕組みや人々のくらしが変化していったことをとらえる。 イメージマップの活用 本単元で登場する人物の写真や絵を黒板に掲示しながら、人物関係図をつくっていく。 自己評価活動	近代国家をつくるために活躍した人物の働きと明治政府が進めた諸改革とのかかわりを関連付けながら考える。 【イ 発言・スピーチ原稿・イメージマップ】	人物と諸改革とのかかわりを関連付けながら説明する。 【ウ 発言・スピーチ原稿】	明治政府が諸改革を行い、急激に世の中が変化していった様子がわかる。 【エ スピーチ原稿・イメージマップ】	

(5) 考察

ア イメージマップの活用

(ア) 事実と事実を関連付けて考えた例

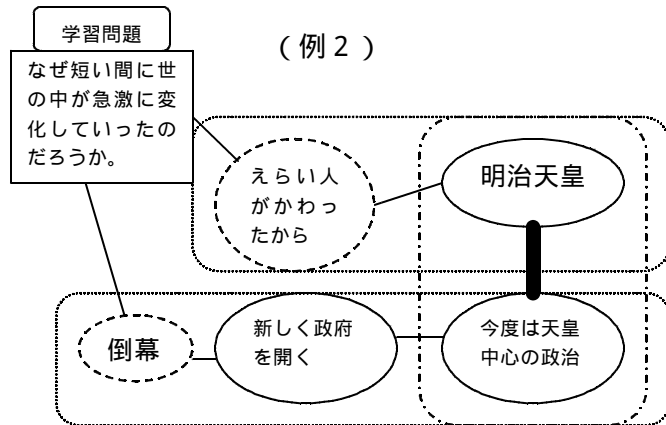
(例 1)



この段階では、学習問題と関わりのある事象を関連付けて書いていれば、論理的に考える力が付いている、と評価した。

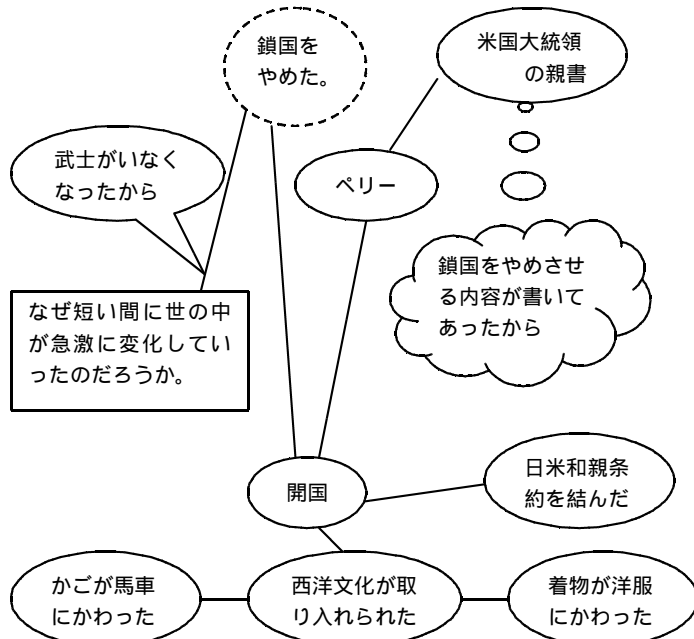
(例 1) のイメージマップは、「なぜ短い間に世の中が急激に変化していったのだろうか」という学習問題に沿って調べたひとつひとつの事象を、関連付けて書いている。これは社会的なものの見方や考え方が深まった一例と言える。

(例 2)



(例 2) のイメージマップは、二つの予想に基づいて、調べ学習を進めてきた結果、「天皇」というキーワードで、事実と事実を関連付けた例である。イメージマップを用いることで、複数の事象の関連に気付き、社会的なものの見方や考え方が広がったと言える。

(イ) 資料から根拠ある予想を立て学習問題から離れずに追究活動を行った例



A 児は、江戸の頃と明治の頃の資料を比較して見たことから、武士がいなくなったということに気付き、「日本が、鎖国をやめたから世の中が変化したのではないか」と予想を立てた。そこで、A 児は、その予想から開国した事実を知り、「日本がどのようにして開国していったか」を自分の学習問題にし、調べる活動をしていった。「開国」という言葉をキーワードに、関連する事象や人物などの情報を集め、書き入れている。

(ウ) 学習問題に正対して、総合的・多面的に考えた例

キャッチフレーズ 「 倒 幕 の 始 ま り は ペ リ ー 」
理由：アメリカ合衆国の使者ペリーが来たのが、倒幕の始まりだ。1853年、ペリーは日本と貿易がしたいために来た。理由は、私の予想ですが、アメリカと貿易をしたら得をするかもしれないと思った。それは、アメリカが「私たちと貿易をしたら、両国の利益になるよ。得をするんだ。」と言ってきたからだ。その言葉にのせられ開国した日本だけど、今思うと得をしていないなと思った。

B 児は、「倒幕した」と予想を立て、どのように江戸から明治の世の中が変わっていったのかについて追究していった。「倒幕」をキーワードとして調べていく過程で「開国する」「ペリー」「西洋文化を取り入れた」「貿易がさかんになった」などの事実や人物が明らかになった。そして、これらの事実や人物を関連させたり、学習問題と照らし合わせたりして考え、キャッチフレーズという短い言葉で表現し、学習のまとめとした。

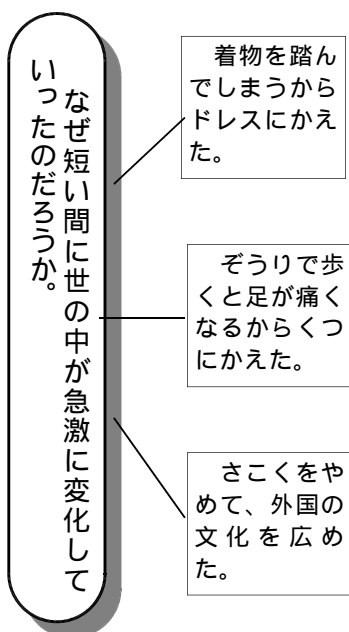
イ 相互評価活動

児童	はじめの予想	相互評価後の考え
A	着物を踏んでしまうから、ドレスにかえた。	草履で歩くと足が痛くなるから、靴にかえた。輸入と輸出が増えた。
B	草履で歩くと足が痛くなるから。	着物を踏んでしまうからドレスにかえた。輸入と輸出が増えた。
C	輸入と輸出が増えた。	着物を踏んでしまうからドレスにかえた。
D	(無記入)	着物をドレスにかえた。

意見交換を行った結果を示したものである。ここでは、友達の意見を聞き、納得して自分のイメージマップに付け加えた項目のみを示した。

この班では、『なぜ短い間に世の中が急激に変化していったのだろうか』という学習問題に正対した予想があまり出ていない。さらに、友達との意見交換後もそのような予想が班の中で通っている。これは、資料からとらえた事実のみにとらわれ、事実に基づいて考えることが十分ではなかったととらえられる例である。

左の図は、A 児のイメージマップの一部を引用したものである。A 児は、学習問題に対しての自分の予想を と立てた。これは、資料から読み取れる事実ではあるが、学習問題に正対したものにはなっていない。



班の中で意見交換を行い、A 児は を付け加えた。しかし、班全体の予想が学習問題に正対していないために、意見交換が効果的であったとはとらえることができない。

しかし、学級全体での意見交換においてこれらの予想が学習問題に正対していないことに気付いて自分の予想を修正し、 を付け加えた。このような A 児の姿は、資料を比較してみることによってとらえた事実を基に自分なりの予想を立てた後、話し合いによって修正していくという自己評価活動が促された例ととらえることができる。

ウ 教師によるモデルの提示（つかむ段階）

T：なぜ世の中が大きく変わったのか、予想を発表してください。
 C1：政治の中心が変わったから。
 T：理由は？
 C1：建物や町全体の雰囲気ががらっと変わっていたので、よほど大きいことがあったんじゃないかなと思ったから。
 T：よほど大きなことって、どんなこと？
何かが変わるときって、人も変わっているよね？ 模範を示す
 C2：政治の中心になる人？
 T：じゃあ、今まで学習したことを思い出してごらん。 既習事項を思い出させる
 C3：平安時代から鎌倉時代になったときも、町の様子がすごく変わった。
 T：なぜだった？
 C3：貴族から武士の世の中になったから。（教科書で確認する）
 C4：本当だ。刀もってる人が町の中に増えている。
 ここで再び江戸の頃と明治の頃の資料に戻る。
 T：世の中の様子が大きく変わるときって、世の中のしくみが大きく変わっているってことなんだね。
 事実に基づいて意味を考えようとした発言を価値付けた。

意見交換前は、「外国の文化を取り入れた」という予想が多かった。これは、資料に現れている事実を基に立てた予想である。

しかし、意見交換後に、江戸時代には外国との交流がほとんどなかったことに気づき、既習事項と関連させて、「世の中の様子の変化は世の中のしくみが変化したからではないか」という予想に修正する姿が見られた。

これは、社会的事象（世の中の様子の変化）の意味をとらえ直すためのモデルの提示が効果的であったととらえられる。

エ 思考を促す資料（つかむ段階）

児童の立てた予想についての理由を書かせた。

予想の理由の中には、資料から読み取った事実を基にした記述が見られた。

これは、提示した資料が児童の様々な思考を促すことができたためと考えられる。

資料から読み取った事実	児童が立てた予想	予想の理由
「江戸は着物、明治のドレス」 「江戸は草履、明治は今と同じような靴をはいた人がある」 「建物が洋風になった」 「江戸の頃は街灯がなく、明治の頃はある」 「明治の資料には、洋風の傘がある」 「木造だ」 「明治に新聞配達がある」 「家が豪華になっている」 「江戸はかご、明治は人力車になっている」 「江戸は刀を差している」 「やりがある」 「武士みたいな人がいない」	江戸幕府がなくなった。 幕府がやぶられて外国との交流がさかんになったからだと思う。 鎖国をやめて、外国の文化が入ってきたから。 政治の中心が変わった。	鎖国をしていたのに外国の文化がこれほど入るのはおかしい。こんなことがおこるのは鎖国を幕府がやめたか、幕府がなくなったしか考えられないから。（外国のもの）服、靴、電灯、馬車などが町に出てきたから。 絵の中で、日本風の家が洋風になっていたので、外国の文化が入ってきたと思う。 ムードや家などががらっと変わっていたので、よほど大きいことがあったんじゃないかなと思ったから。

オ 自己評価活動（毎時）

(ア) 成果を感じた児童の自己評価カード例（p.18 参照）

A 児		11/20	11/21	11/27
調 べ る	自分の調べていることは、学習問題から離れていないか。			
	自分が選んだ方法で、学習問題は解決できそうか。			
	友達の考えのよさを見付けたり、自分の考えを見直したりすることができたか。			

自分へ

後の方から、わからないことがわかってきた。

11月21日の相互評価活動で多様な考えにふれ自己の理解を深めることができたことと自らを振り返っている。相互評価活動から学習問題の解決に近付いていったことを把握することができた。

B 児		11/20	11/21	11/27
調 べ る	自分の調べていることは、学習問題から離れていないか。			
	自分が選んだ方法で、学習問題は解決できそうか。			
	友達の考えのよさを見付けたり、自分の考えを見直したりすることができたか。			
		11/28		
ま と め る	学習問題が解決できたか。			
	調べたことをわかりやすくまとめて発表できたか。			
	友達の考えのよさを見付けたり、自分の考えを見直したりすることができたか。			

自分へ
学習内容は理解できた。
調べた内容が深くなってきた。

自分へ
明治の改革、明治維新を理解できた。

こうした評価を行ったB児は、イメージマップ上で複数の予想に基づいて調べ学習を行い、分かった事実を関連付けて線で結んでいた。関連させて考えられたことで、調べた内容が深くなったと自己を肯定的に評価していることが分かる。

(イ) 課題に気づき、次への目標をもった児童の自己評価カード例

C 児		11/20	11/21	11/27
調 べ る	自分の調べていることは、学習問題から離れていないか。			
	自分が選んだ方法で、学習問題は解決できそうか。			
	友達の考えのよさを見付けたり、自分の考えを見直したりすることができたか。			
		11/28		
ま と め る	学習問題が解決できたか。			
	調べたことをわかりやすくまとめて発表できたか。			
	友達の考えのよさを見付けたり、自分の考えを見直したりすることができたか。			

自分へ
文章が長いな。もっと簡単にして発表しよう。

自分へ
ちょっと学習問題から離れていた。
次は聞いていておもしろくてわかりやすいようにまとめる。

C児のイメージマップを見ると、11月27日に調べた内容がペリーについてのみ深く掘り下げていく内容となっていた。それが、学習問題から離れていたことに気づき、印を付けている。また、まとめの段階では次の学習に生かそうとしていることが記述から把握することができる。

D 児		11/28
ま と め る	学習問題が解決できたか。	
	調べたことをわかりやすくまとめて発表できたか。	
	友達の考えのよさを見付けたり、自分の考えを見直したりすることができたか。	

自分へ
前より予想が立てられるようになって、よかった。調べたことをまとめるのが苦手だから、もう少しうまくまとめられるように。

D児は、この学習全体を振り返り、予想が立てられるようになったことを成果としつつも、調べたことをまとめることを自己の課題にし、次時の学習に生かそうとしている。学習活動全体を自己評価している例である。

(ウ) 今回の自己評価活動から分かったこと

- a. 児童に常に学習問題を意識させることができる。
- b. 自己評価活動を複数の単元で繰り返し行い、比較していかなければ自己評価についての変容は把握しづらい。
- c. 自己評価カードの形式をさらに工夫して、自己評価力が伸びたかどうかを教師が的確に把握できるように改善していく必要がある。

6 研究のまとめ

研究仮説「自分の考えや追究の仕方について自己評価する力を伸ばせば、社会的なものの見方や考え方が育つであろう」を設定し、研究を進めてきた。研究構想図に掲げた2つの研究の内容について、以下の成果と課題を得ることができた。

(1) 研究の成果

ア 自己評価力育成計画表を基にした指導について

次の3点から、自己評価力育成計画表を作成して指導に当たることは、児童の自己評価力を育てる上で有効であったと考える。

- ・「つかむ - 調べる - まとめる」の学習過程の中に、自己評価力を高めるための様々な工夫を位置付けることができた。
- ・自己評価が行いやすい学習活動や表現の仕方を工夫することができた。
- ・児童に自己評価活動を行わせる時期と自己評価の対象とする事柄を明確にすることができ、事前に適切と考えられる助言や示唆を考えることができた。

イ 自己評価力を高める工夫について

イメージマップの活用・自己評価活動について、次の効果が明確になった。

イメージマップの活用による効果

- ・調べた事実を関連付けてとらえ、学習問題に対する自分の考えをもつことができた。
- ・キャッチフレーズを表すことで、社会的事象の意味について考えることができた。
- ・イメージマップを基に自己評価をし、常に学習問題を意識していくことができた。
- ・自分の課題や成果を自覚し、次の学習問題に見通しをもって学習することができた。

自己評価活動による効果

- ・文言を精選して、自己評価カードを作成したため、児童がどの単元でも同じように自己評価することができた。

(2) 研究の課題

ア 児童の学習状況の把握

教師は、児童の自己評価した姿を自己評価カードやイメージマップなどから把握し、指導を展開してきた。この教師による児童の学習状況の把握や指導の展開について、さらに検証し、より効果的な指導の在り方を追究していくことが課題である。

イ 自己評価力を高める工夫

自己評価力を高める工夫として設定した「教師によるモデルの提示」・「思考を促す資料」・「相互評価活動」については、今後、実践を通して、検討を重ね、よりよい指導の在り方を検討していくことが課題である。

(3) 今後の方向性

本研究における検証単元の学習問題のように、「なぜ……か」と疑問から解決に向かう学習問題の場合、イメージマップは有効であった。しかし、指導にあたり、一つの学習問題から新たな学習問題が生まれ、学習を展開していく学習展開の場合や「……しよう」というような活動型の学習問題では、どのようなイメージマップが効果的であるかということ在今后、多様な実践の中で、検証していく。

平成15年度教育研究員研究報告書

東京都教育委員会印刷物登録
平成15年度 第31号

平成16年1月21日

編集・発行 東京都教職員研修センター
所在地 東京都目黒区目黒1-1-14
電話番号 03-5434-1974

印刷会社名 勝田印刷株式会社